

Gregory A. Barton

The Global History of Organic Farming

御手洗 悠紀

本書は、二〇世紀初頭に登場したイギリス有機農業が帝国の植民地支配を足がかりにグローバルに展開していく過程を描いたものである。

著者グレゴリー・A・バートンは、西シドニー大学歴史学部教授で、イギリス帝国史および環境史の専門家である。これまでの主著として、植民地官僚の森林官に焦点を当てた『帝国の森林管理と環境保護主義の起源』（未邦訳）^①が挙げられる。

同書に対して本書は、農学者アルバート・ハワード（一八七三—一九四七年）の有機農業思想およびその国際的影響力を論じる。

ハワードは日本やアメリカにおいて「有機農業の祖」と呼ばれ、彼の著作はアジアやインドの伝統的な農業を高く「再評価」するものとして見なされてきた。他方で、イギリスにおいては、イギリス有機農業団体の設立に携わらなかったことから外縁的な位置付けにあった^②。しかし、本書はハワードの妻の親族が保持していた手紙や日記等の新規史料を用いることで、従来の研究で描かれてきたものとは異なるハワードの人物像を提示する。そして、彼が英領インドで農民の伝統的な農業を「参考にして」、開発した有機農法であるインドル方式のイギリス有機農業に与えた影響

も含め、従来の有機農業史の見直しを迫る。これまでの「農民に寄り添う植民地科学者」としてのハワード像は史料の不足に伴う研究者の誤解に基づくものであったと撤回された。くわえて、ハワードの妻らの活動をも視野に入れることで、彼らが提唱した有機農業思想の国際的な有機農業運動に対する影響力の大きさが主張されている。

まず本書の内容を簡単に紹介したい。第一章「有機による挑戦の諸起源 Roots of the Organic Challenge」では、農業革命以後のイギリス農業の歩みを説明する。一九世紀に入ると農学が登場し、同時に輸入肥料の多投に支えられた産業としての農業が始まった。しかし、新大陸や植民地から安価な農産物が流入した結果、イギリス本国の農業は衰退していった。以上を背景に、農学者や森林官の中には化学肥料への依存に警鐘を鳴らす者も登場し始める。彼らのあいだで、土壌の肥沃度をめぐる議論が巻き起こったことから有機農業運動が生じたという。

続く第二章「有機農業の文化的土壌 The Cultural Soil of Organic Farming」では有機農業の思想的支柱として、イギリスにおけるロマン主義、農業や農村社会を国の基盤として重要視する農本思想^{アグライズム}、近代社会における健康問題への関心の高まり、くわえてドイツにおいて一九世紀末に登場した人智学、および生改革運動を取り上げ紹介している。こうした思想が登場したのは、近代化に伴い住環境や労働環境だけでなく、食生活までも変化したことが大きい。物質主義を批判する人智学を確立した哲学者ルドルフ・シュタイナーは、農場を一つの有機体として捉えるバイオダイナミック農法を提唱した。この農法はドイツ語圏における伝

統的な農業を参考にしたと言われており、作物や家畜のみならず鉱物や天体をも視野に入れ、その循環を論じた点に特徴がある。

ハワードがバイオダイナミック農法を「オカルト」と批判していたことを踏まえて、同農法は有機農業理論の成立に科学的な貢献をしていないと著者は主張する。本書によれば、バイオダイナミック農法の精神性を重んじる「オカルト的な側面」が有機農業の特徴として強調されることで、有機農業は一九七〇年代に国際的な有機農業運動が生じるまで、周縁的な位置に置かれることになった。同様にドイツ語圏の近代化や都市化に反発する社会運動群である生改革運動の中で営まれたもう一つの有機農法については一九三〇年代にアングロサクソン圏における有機農業の理論を吸収し、堆肥実践を模倣していたと評価される。

第三章「アルバート・ハワードとシュロブシャーとしての世界 Albert Howard and the World as Shropshire」では、ハワードの経歴のうち、生誕から一人目の妻ガブリエルと結婚するまでが、続く第四章「インドにおけるハワード一家 The Howards in India」では植民地官僚として英領インドで農学研究をするハワードおよびガブリエルの活動が詳述されている。本書では、ハワードを支えた二人の妻も重要な人物たちである。ガブリエルは科学者として、癌で死没するまでハワードとの共同研究に従事した。後妻となるガブリエルの妹リーゼはハワードの死後、彼の業績をまとめ、著名にする手助けをした。ハワードはインドの農学研究所在一九二五年に着任したが、すぐに有機農業理論を展開したわけではなかった。むしろ彼の仕事は、燻蒸消毒を利用することによって小麦の病害虫被害を減らすことから始まっており、

彼が晩年に抱くことになる農業への反発が渡印前から生じていたわけではない、と本書は指摘する。また、本国イギリスに比べて英領インドの自由な研究環境が戦後の「緑の革命」に接続する化学肥料や農業に依存する農業と、それとは反対の有機農業とを同時に育んだという。

第五章「前近代の知恵を辿る The Search for Pre-Modern Wisdom」で著者は、有機農業提唱者らがいかに「オリエンタリスト」であったかを明示する。それに伴い有機農業の起源がアジアやインドの農民にあるという従来の有機農業史研究の主張もまた誤った「神話」であり、ハワードや彼の妻らの業績を正当に評価できていないと論ずる。従来説の成立要因には、以下の三点が挙げられている。一点目は、ハワードによる日記や手紙、初期の報告書が紛失しているため、研究者は出版されている書籍しか参照できなかったこと。二点目は、先行研究は後妻リーゼが書いたハワードの伝記を参考にしているが、彼女は前妻ガブリエルとは異なり、ハワードがインドール方式を開発した時期を共に過ごしていなかったこと。そして三点目は、前述の「神話」が学者を含め、多くの有機農業支持者にとって魅力的であったことである。本章はガブリエルが母に宛てて書いた手紙を用いることで、彼女とハワードは農民からボトムアップ方式で学んだのではなく、また、ロマン主義に陥ることもなく、科学的な観察と実験からインドール方式を導き出したと結論づける。感染症の恐れや農民の偏見から、人糞尿を中国で行われているように利用することは困難であるとハワードは考えた。インド農民が利用できる経済的な肥料を考案する必要がある、その際、人造肥料や農薬は高価で利用

できなかったため代替策が求められる。その結果、考案されたのがあらゆる廃棄物を土壌に戻すインドール方式であった。

ガブリエルの死後、イギリスに戻ったハワードがルイーゼと再婚する一九三一年以後のことが、第六章「堆肥戦争」[*The Compost Wars*]で詳述されている。ルイーゼは古代ギリシャの古典文学の専門家としてキャリアを始めていたが、結婚後は夫の仕事を手伝い、自らも農学の本を執筆している。イギリスでインドール方式を広めるために、ハワードは雑誌や新聞に寄稿したり、政府高官や紅茶商社の取締役と会談したりしていた。一九三九年に彼がチェシャー州の医師、農家、保健担当官らと共に公表した『医療における一つの誓約』(*A Medical Testament*)によつて、インドール方式と人々の健康が結びつけて考えられるようになり、ハワードの業績は大眾に広く知られることになった。しかし結局のところ、大規模農業や政府は彼の農法を支持せず、そのためハワード夫妻は家庭菜園を対象に活動していくことになる。

第七章「帝国へ、そしてそれを超えて」(*To the Empire and Beyond*)とは第二次世界大戦以後が取り扱われる。戦後の食糧難は化学肥料を用いた増産力のある農業への需要を高め、有機農業にとっては向かい風となった。脱植民地化のなかで、有機農業運動の担い手は右派から左派へと変化した。また、帝国が解体すること、利益追求主義の資本科学(*capital science*)に反対する帝国科学(*Empire science*)が失われたという。ハワードは執筆活動が続けていたが一九四七年に死没し、ルイーゼがその活動を引き継いだ。彼女は、夫アルバートの名を冠した組織経営を断続的に行うことで、人間の排泄物を含む都市部の廃棄物を堆肥

化する方法と意義の普及に努めた。ここからは、主にアメリカや日本の有機農業研究においてインドール方式の大きな特徴とされていた人糞尿の堆肥利用が、ハワードの死後ルイーゼが修正を加えたことによつてもたらされたものであったことが分かる。一九四六年にはイギリスで有機農業団体ソイル・アソシエーションが、一九四八年にはソイル・アソシエーション南アフリカ支部が結成されており、一九六〇年代に生じる国際的な有機農業運動においても中心的役割を担っている。だが、ハワードは「科学を軽視する」ソイル・アソシエーションとは距離を取り、ルイーゼもそれに倣っていた。

一九六〇年代に生じた有機農業運動において重要な役割を担った国としてイギリス、アメリカ、日本が第八章「有機農業のグローバル化」(*The Globalization of Organic Farming*)で取り上げられている。まず、一九七一年に経済学者E・F・シューマツハーがソイル・アソシエーションの会長を務めたことで、イギリス内の有機農業に対する国民的関心が高まったという。次に、アメリカの大学や化学メーカーは、成長する世界人口を養うために資本集約的な増産力のある農業が必要であると強く主張し、有機農業の批判を強めていた。一九四〇年代以降は「科学への樂觀主義」が根強く、科学があらゆる問題を解決すると考えられていたが、一九六〇年代に入ると、化学への不信感が現れはじめる。画期として挙げられるのは、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』(一九六二年)であり、産業的な農業を批判する有機農業への関心が急激に高まった。最後に、食品安全や環境保護への関心の高まりから広がった日本における有機農業運動が取り上げられてい

る。その特徴は、消費者と生産者が直接つながる「提携」であった。そして第九章「一九八〇年代から現代『The 1980s to the Present』」では、一九八〇年代以後に有機農業が政策に取り込まれていく過程としてアメリカおよびEC（後のヨーロッパ連合）の事例が取り上げられている。欧米で整えられた認証基準が日本をはじめ諸外国に広まっていたという。後に詳述するが、本書は特定の地域や団体の事例が併記されているに留まっており、グローバル史と呼べるのか疑問に思われる。

終章となる第十章「有機農業とグローバル化の課題Organic Farming and the Challenge of Globalization」ではこれまでの議論を踏まえた総括がなされ、イギリス帝国で発展した有機農業が、森林政策と並んで環境保護意識を育むに際して重要な役割を担ったと評価する。また、現代の有機農業が抱えている課題として、慣行農業に取って代わることは実際のところ、どこまで可能であるのかということが挙げられている。この問題を考える上で、ハワード夫妻の業績が示唆を与えていると著者は述べているが、欲を言えばもう少し具体的な展望が欲しかった。

二〇一八年に出版された本書には英語圏で既にいくつかの書評が出ている。国際開発学が専門のマルコム・ブラッキーは書評の中で、本書はタイトルに冠されているようなグローバル史ではなく、あくまでイギリス帝国史であると批判している^⑤。本書では、ハワードの思想がグローバルに展開していたことは分かるが、語られなかった国や地域においてどのような有機農業の取り組みがあったのかは不明瞭なままであり、一九六〇・七〇年代に先進国を中心に展開されたグローバルな有機農業運動への接続が十分に

論じられていないという評価に評者も同意する。

また、本書では従来有機農業の起源のひとつとして指摘されてきたドイツ語圏における有機農業の位置付けが低く、著者による理解自体に疑問が残る。まず、たしかにバイオダイナミック農法はハワードによって批判されているが、このことがただちに有機農業運動への影響力の低さを表しているとは言えないだろう。本書でも指摘されているようにシュタイナーはバイオダイナミック農法を提唱した後、すぐに死没しているため、後継者たちが理論を体系化し、実践に落とし込んでいった。そして彼らはナチスによる弾圧から逃れるために、主としてアメリカを活動の場とした。彼らの書籍は英語のほか、多言語に翻訳され世界中でバイオダイナミック農法が営まれるようになる。そして一九七二年に国際有機農業運動連盟が結成されるに際しても、バイオダイナミック農法の団体が名を連ねており、その国際的影響力を無視できないことが分かる。バイオダイナミック農法はその非科学的な部分が着目されがちであるが、こうした視点では今日においてもバイオダイナミック農法が実践され、その農法で生産された農産物がヨーロッパを中心に高く評価されるに至っているのかを説明できない。また、ドイツ語圏の生改革運動における有機農業の取り組みについては、一九二〇年代から専門の雑誌が出版されており、本書の指摘するような単純にイギリス有機農業理論を模倣したものではないと言える。本書では、従事者が農村に移住することなく有機農業実践に取り組んでいたことも述べられるが、生改革運動における有機農業は都市批判のなかで農村部や郊外へ入植し、取り組みまれており、ひとつの事例を取り上げて「都市的な運動」と評す

るのは論拠が十分ではない。^⑦

本書と同年に出版された、ダン・マッカナンによる研究は、ドイツ有機農業のうち著者が「非科学的」と評したバイオダイナミック農法を中心的に取り扱っている。^⑧ どちらの本も自らの研究対象である有機農業提唱者を有機農業の起源として結論づけたため、イギリス有機農業史家であるフリーリップ・コンフォードは「シェタイナーか、ハワードか？」と題した書評を寄稿している。^⑨ しかし、起源を巡る論争に決着をつける事が容易ではないことは想像に難くないであろうし、起源を厳格に定めることに果たしてどのような意義があるのか考えなければならない。これらの研究に共通する問題として、有機農業のもつエコロジー思想を無批判に「良いもの」とし、さらにそれをナショナルな語りに回収させてしまっている点を指摘できる。ナチズムと有機農業の関連性が明らかにされているように、環境保護主義や有機農業思想を単純に称賛することは危険である。本書においては「科学」という言葉を用いて、ハワードの有機農業思想とイデオロギーを切り分けて論じようとしているが、その問題については後述する。先にも述べたように、イギリス有機農業の影響がまるで一方的なものであったかのような表現が散見されるが、実態としては各有機農法の従事者らが相互に研究や実践を参照し合いながら議論を発展させているのであり、一国史観ではこの知識や実践伝播の双方向性が見落とされてしまう。したがって、「帝国史」を超えたイギリス中心主義的ではない「グローバル史」の枠組みは、この限界を乗り越えるものとして期待できる。例えば、本書ではイギリス連邦における取り組みが中心的に取り上げられているが、インドール

農法の取り組みはスペインの植民地でも営まれていた。もしこうしたイギリス帝国外の取り組みを視野に入れたのならば、「熱帯農業」や「植民地農業」という言葉で評価されるインドール農法のグローバルな展開をより多面的に考察できたのではないだろうか。もちろん労働者側のことについては、史料の制約があり研究が困難であることも指摘しなければならない。

次の問題点として、先に指摘したように本書において「科学的」であることが高く評価されている点が挙げられる。本書ではファシズム、人智学、ロマン主義、あるいは農本思想の思想からハワードの有機農業を切り離すために「科学」という用語が用いられており、インドール方式こそ現代の有機農業につながるものとして見なしている。たしかに有機農業が政策や市場に組み込まれる時に、有機農業従事者や支持者の中には思想的な面を削ぎ落とし、科学的な面を強調しようとしたものもいた。しかし、現代の有機農業がハワードの思想のみで成立しているわけではないことは先述の通りであり、彼以外の有機農業思想を切り捨て、さらには農業実践を軽視するような科学主義的論調に評者は当惑する。本書が指摘するように、有機農業は近代農法が登場する以前の農業に単純に戻すことを必ずしも理想としているのではない。しかし、だからと言って有機農業提唱者や従事者が「アジアやインドの農民を近代化のなかで忘れ去られた知識を持つ存在」として捉え、その伝統的な農業を参照していたことが、現代の有機農業に全く影響を与えていないことにはならないだろう。「神の眼」を持つ現代の歴史家が、過去の人たちの誤解や偏見を「オリエンタリズム」と評するのは容易であり、たしかに過去の農学者のア

アジアやインドに対するまなざしが西洋のレンズを通していることは否定できない。ただ本書ではハワード夫妻以外の農学者をオリエンタリストと評する一方で、アジアやインドの農民を「前近代」的なもの、非科学とし、西洋科学を「近代」的なものとする二項対立的なものの見方が取られている。この本書の視角もまた「オリエンタリズム」なのではないだろうか。また本書は、帝国主義の仕組みの中で生まれた科学を営利追求的な資本主義下の科学を否定するものとして肯定的に捉えているが、まるで帝国科学はイデオロギーや利益追求とは無縁の「純粹無垢な科学」であるかのような。もし著者が主張するように、インドール方式がインド農民との双方向的な作業のなかで登場したのではなく、インド農民を単なる客体として捉え開発されたのであれば、農民から学んでいたことを「神話」だったと批判し、インドール方式は「科学的」であると評価するよりも、インドール方式の帝国主義性をこそ指摘すべきではないだろうか。そして、ハワードのインドでの活躍を強調するルイーズによる彼の伝記だけでなく、従来の研究で分析対象とされてきたハワードの書籍の叙述方法をも有機農業史家の分析対象とし、問い直さなければならぬ。

本書は、従来の有機農業史研究では十分に語られてこなかった有機農業と帝国主義の関連を明示することで、新たな論点を提供しているが、全体として疑問の残る部分が多く、今後さらなる議論が求められる。

- ① Gregory A. Barton, *Empire Forestry and the Origins of Environmentalism* (Cambridge University Press, Cambridge, 2002).
- ② 本書で利用されたアーカイブについては冒頭部の謝辞で紹介されて

いるように、ケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・カレッジに寄贈されており、他の研究者も使用できるようになっている。

- ③ 保田茂「日本の有機農業——運動の展開と経済的考察」(ダイヤモンド社、一九八六年)；古沢広祐「第三部10、グローバルとローカルを結び直す——日本・アジア・世界の食と農を考える」池上甲一、原山浩介編著『食と農のいま』(ナカニシヤ出版、二〇一一年)、二四〇—二五四頁など参照。
- ④ Philip Conford, *The Origins of the Organic Movement* (Floris Books, Edinburgh, 2001).
- ⑤ Malcolm Blackie, 'Review Gregory A. Barton: The Global History of Organic Farming', *Food Security*, 11 (2019), pp. 253-255.
- ⑥ Holger Kirchmann, 'Biological Dynamic Farming: An Occult Alternative Agriculture?', *Journal of Agricultural and Environmental Ethics* 7 (1994), pp. 173-187.
- ⑦ Gunter Vogt, *Entstehung und Entwicklung des ökologischen Landbaus im deutschsprachigen Raum* (Stiftung Ökologie & Landbau Bad Dürkheim, 2000)；御手洗悠紀「戦間期・戦後ドイツ語圏の有機農業——「生改革運動」における「自然農法」に着目して」『農業史研究』第五二号(二〇一八年)「六七—七九頁」。
- ⑧ Dan McKanan, *Eco-Alchemy: Anthroposophy and the History and Future of Environmentalism* (University of California Press, Oakland, 2018).
- ⑨ Philip Conford, 'Book reviews: Steiner or Howard?', *The Organic Grower*, 43 (2018), pp. 32-33.
- ⑩ Peter Staudemeyer, 'Organic Farming in Nazi Germany: The Politics of Biodynamic Agriculture, 1933-1945', *Environmental History*, 18 (2013), pp. 383-411；藤原辰史『ナチス・ドイツの有機農

業——「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」（柏書房、二〇二二年）など参照。

(153×134 mm 二五六頁 Oxford University Press

二〇一八年二月)

(京都大学大学院農学研究科博士後期課程)